# JIC インフォメーション

第207号 2020 年 7 月 10 日
年 4 回 1･4･7･10 月の 10 日発行
1 部 500 円

発行所:JIC 国際親善交流センター　発行責任者:伏田昌義　http://www.jic-web.co.jp

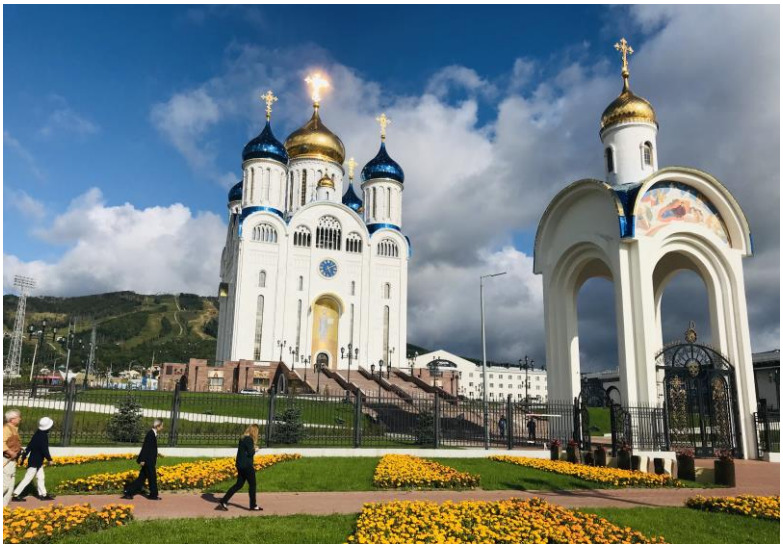


東京オフィス:〒160-0004 東京都新宿区四谷 2-14-8 YPC ビル 7F　TEL:03-3355-7294　jictokyo@jic-web.co.jp

大阪・ロシア留学デスク:〒540-0032 大阪市中央区谷町 2-7-4 谷町スリースリーズビル 7 階 TEL:06-6944-2341


## ロシア・旧ソ連 国際交流誌

はりねずみのジェーニャ



写真は現在のサハリン、ユージノサハリンスク市(2019 年 8 月撮影)
(右上)日本時代を偲ばせる郷土史博物館、(左下)アントン・チェーホフの像、(右下)再建されたロシア正教の寺院

http://www.jic-web.co.jp


キルギスで日本語を教える（1）
人懐っこい子供たちに囲まれて･････････倉谷 恵子･･････2P
＜連載＞ シベリアの愛（2）
いざトムスクへ･･････････････稲塚 俊介（JIC 東京）･･･5P
＜新刊紹介＞ 帝室劇場とバレエ・リュス･･････････････････7P
＜講演禄＞ サハリン残留朝鮮人について
～祖国（パトリ）を奪われた人びと
････････関　正則（明石書店編集部）･･････8P
ロシア文化フェスティバル 9 月 9 日にオープニング ････16P
ロシア映画情報


**JIC では、Ｊクラブ(JIC 友の会)会員を募集しています。**
**年 4 回の情報満載のインフォメーションをお届けします。**

キルギスのビリムカナ・カント校で日本語教師として働いている倉谷恵子さんに「キルギス・レポート」を書いていただきました。JIC ではビリムカナ学校からの要請を受けて 2017 年からボランティア教師の募集、派遣を行っていますが、倉谷さんは 2018 年 9 月から現地に赴任。2 年間教師生活を送り、今年 9 月から 3 年目の教師生活に挑みます。毎年 3～4 名のボランティアの方々がキルギスでの日本語教育に取り組んでいますが、倉谷さんが経験者として現地に留まってくださっていることは新任教師にとって大変心強いものがあります。

生活環境や気候風土も日本とは随分異なるキルギスでの教師生活は、なかなか一筋縄ではいかないようですが、苦労もあれば喜びもある充実した体験であることが伺われます。（編集部）

## キルギスで日本語を教える(1)

# 人懐っこい子供たちに囲まれて

**倉谷　恵子**（在キルギス・日本語教師）

「そんなに魅力的な国？好きになった？空気が体に合うの？」

キルギス共和国での日本語教師ボランティアを 3 年目となる来期も続ける意思を告げると、日本の家族や友人は口をそろえてこう尋ねた。

私が働いているのはキルギスの首都ビシュケクから車で 40 分程走ったカント市にある私立の小中高一貫校(школа)だ。国のプログラムで派遣されているのではなく、学校との直接契約である。任期は 9 月から 5 月までの 9 カ月。給与は現地の教員たちと同水準で支払われ、渡航費は自費である。日本とキルギスでは物価、給与水準ともに大きな開きがあるため 9 カ月分の給与を合計しても往復の航空券代にはとても足りない。青年海外協力隊のように緑色の公用パスポートを携えた有償ボランティアなら渡航費や手当てが支給されるし、現地の言語を習得する訓練期間もある。しかし私たちには金銭的なメリットも語学面のサポートもない。退職者でも学生でもない現役世代の私が身銭を切って渡航し、他のボランティアが 9 カ月で去っていく中、1 人だけ任期を更新して働いているのだから、キルギスをよほど気に入ったのかと問いたくなる気持ちは十分に分かる。

正直に答えよう。特別な魅力は感じないし、好きになった訳でもない。年中鼻と喉の乾燥に悩んでいるのだから空気が合っているとも言いがたい。むしろキルギスに滞在すればするほど、祖国日本を恋しく思う気持ちが強まった。ではなぜキルギスの子どもたちを前に教壇に立ち続けているのか？自分にも明確に答えられない。

### キルギスとの出合い

キルギスは 1991 年に旧ソビエト連邦(ソ連)から独立した中央アジアの国だ。国土面積は日本のおよそ半分、人口は約 1／20 で、農村では人よりも羊や牛、馬を見かける頻度の方が高い。キ

2019 年度の同僚と（右が筆者）

ルギス人の多くはかつて移動式住居「ユルタ」で暮らしていた遊牧民族である。公用語はロシア語、国語はキルギス語で、英語はほとんど通じない。周辺国は東に中国・新疆ウイグル自治区、北にはカザフスタン、西にウズベキスタン、南にタジキスタンがある。世界で2番目に透明な湖「イシククル」が国の東部にあり、夏場は観光客でにぎわう。キルギスのニュースを耳にする機会はほとんどなく、日本人の関心も決して高くないが、実はカザフスタンやウズベキスタンとともにキルギスには日本語学習者が少なくない。

経済誌の記者兼編集者として働いていた私はずっと旧ソ連諸国ともロシア語とも無縁の生活を送っていた。ロシア語圏に精通した読者の皆さんに申し上げるのも気が引けるが、海外といえば西ヨーロッパや北アメリカ、アジアといえば中国からインドネシアあたりが想像の範囲であり、ユーラシア大陸の中央に広がる旧ソ連は地図上で「視界に入っても認識していない」国々だった。

転機が訪れたのは 2 年前の 4 月。働いていた雑誌が休刊になった(現在ウェブ版に移行、再開している)のを機に、海外旅行

や短期の語学留学でもしてみようかとネットで調べていた時だった。偶然に JIC のホームページを初めて見て、キルギスでの日本語教師募集の案内を目にしたのである。記者や編集者は専門分野を越えて様々な情報にアンテナを張りながら、人に話を聞き、文章を読み、考え、書くことが仕事だ。取材対象や読者と関わりながら生きた日本語とともに働いてきた。日本語教師が対象とするのは生徒だが、言葉に向き合うという意味では共通している。これまでの経験と知識を生かして、日本語を違う角度から見つめる機会にできるのではないか。教師の職にも中央アジアにも関心を持ったことはなくロシア語も話せなかったのに、そんな思いが自分を動かし応募してしまった。

今だから明かすが、実はこの時点で募集要項の給与額の数字を読み誤り、一桁多く数えていた。思い込みは恐ろしいもので日本の給与水準が念頭にあるから、まさかひと月の食費にも満たない額が彼の国での1カ月の給与とは思いもしなかったのだ。勘違いに気づいたのは採用の知らせが届いた数日後。しばらく呆然としたが、頭を切り替えて「私費を使うのだからこれこそ本当のボランティアだ。国や企業に縛られない自由の身だから嫌ならいつでも辞められる」と考えた。肩の力は抜けたが、その秋に始まった現地での仕事と生活は戸惑いの連続だった。

ビリムカナ学校の教室の様子

## 現地での授業の現実

日本人の日本語教師の多くは、高校生以上の日本語を学ぶ意思を持った外国人や日本語を必要とする環境下の子どもたちを相手に教えていると思うが、私たちはそうした日本語教師とは少々異なる立場に置かれている。

教える対象は日本語を当面必要とせず、日本語を耳にする機会がない小、中学生。しかも現地人教師の助手ではなく自分1人で1クラス20数人を1日3コマ以上、月曜から金曜まで毎日担当する。就学間もない小学 1 年生の中には母国語であるロシア語すらおぼつかない子どももいる。さらに低学年を中心に学期中の転出・転入が頻繁にあり、日本語を学んだことのない転入生にはその都度ゼロから教える。

私が赴任したのは同校で日本語教育が始まった翌年で、子ども向けの教科書もなかった。ロシア語圏の宿命なのか日本はもちろん西側諸国に関する情報が少なく、大人も子どもも日本文化に触れる機会がほとんどない環境で、何を目標にすえてどんな方法で教えるかといった指針作りから始めなければいけなかった。

しかし日本語教育の内容を議論する以前に、頭を悩ませることが多々あった。まず子どもの授業態度が日本の平均的なそれとは明らかに違うのだ。授業中に果物やお菓子を平気で食べる。席を立って私語を交わす。物差しやペンを投げ合う。ノートをとらずにお絵描きをする。宿題をしない。始業のチャイムがなっても席に着かず、終了のチャイムと同時に駆け出す。低学年なら教室内を走り回り取っ組み合いのけんかをするし、高学年だと机の下のスマートフォンに夢中になる。問題児を集めたクラスではなく、どのクラスでも多かれ少なかれこのような光景が散見される。真面目な子どももいるのだが、他の子どもの落ち着きのなさに埋もれて、優秀な子どもの能力を伸ばせない。

当初は外国人教師にだけそのような態度をとるのかと思ったが、そうでもない。確かにクラス担任の授業ではおとなしくしているようだが、よく観察すれば授業に身が入っていない生徒が大勢いる。英語など他の教科の現地人教師も生徒の騒がしさを認識している。

日々の授業を成立させることに精一杯で、時に日本語を教えに来たのか子どもの面倒を見に来たのか分からなくなった。1 年生、2 年生を担当していた私は毎日が体力勝負。1 日の授業が終わると何もする気力はなく、自室の窓から外を眺めるだけで 1 時間、2 時間と時が過ぎ、夕方になってとぼとぼ散歩に出て外の空気を吸いながら夕食までに何とか平常心を取り戻す。そんな「精根尽き果てた」1 日の終わり方も珍しくなかった。

## 人懐っこい子どもたち

では子どもたちは日本人教師に背を向けているのだろうか？

答えは「Her(ニエット、いいえ)」。休み時間に廊下ですれ違うと、担当クラスの子どもたちは走り寄って抱きついてくるし、担当ではない学年の子どもたちも「コンニチワ」、「オハヨウゴザイマス」とあいさつをしてくる。授業中にまったく言うことを聞かない子どもが「ケイコセンセイ、今日は僕たちのクラスの授業はあるの？」とわざわざ聞いてくることもある。チャイムより早く教室に入って授業の準備をしていると「今日は何を勉強するの？」とうれしそうに尋ねてくるし、「おばあちゃんが日本の昔話を聞かせてくれたよ」と得意になって日本関連の話題を持ち出す子もいる。他にも「今日は誰々の誕生日だよ」、「●●は日本語で何て言うの？」、「日本人も肉は食べるの？」など、その場の思いつきをロシア語でどんどん話しかけてくる。こちらとコミュニケーションをとりたい気持ちがあふれ出ている。

また授業中に質問をすると、分からなくても率先して手をあげ、1人ずつ前に出て歌や詩の暗唱をさせようとすると、覚えてもいないのに前のめりになって走り出てくる。人前で発表することに実に前向きである。日本の風景や食べ物の写真を見せれば口をそろえて「きれい」「おいしそう」と言い、私の持ち物や洋服な

どあらゆるものにも関心を示して質問を投げかけてくる。

教師を慕う気持ち、臆せず人前で声を出す精神、未知の文化への興味。外国語学習に必要な要素は十分に備えているのだ。しかし前述の通り、落ち着いて話を聞き黙って考える時間を作ることがむずかしいために、インプットしたものを定着させてアウトプットするという学習の基本がなかなか身につけられずにいる。

## 仲間

疲労困憊の毎日でも、あきらめることなく仕事を続けられたのは同僚の日本語教師がいたからだ。昨年度の同校での日本人ボランティアは自分を含め５人、キルギス人教師は１人。今年度は日本人３人、キルギス人２人だった。昨年度はそれぞれの住まいが離れていたために、全員そろって話す時間は多くなかったが、週 2 回の高学年校舎での授業日は教師控室で皆が顔を合わせた。取り立てた話をしなくても、表情や仕草を見ていれば、それぞれにとって辛い日だったのか、嬉しいことがあったのかなど、それとなく分かった。ロシア語ばかり耳に入る環境で日本語が通じる相手は貴重だから、他愛ない冗談を交わすだけでも安堵できた。同じ学年を担当していたボランティアとは授業内容の提案、進行具合の確認をしながら失敗例、成功例を共有して、ため息をついたり励まし合ったりした。

昨年度の日本人ボランティアのうち 3 人、今年度は 1 人が大学生で、社会に出て久しい私には日本の若者とともに働くことも新鮮な体験だった。彼らはボランティアの仕事と並行して自身の学びにも熱心だった。ロシア語検定や漢字検定の勉強にいそしみ、大学で専攻するテーマについても真面目に話してくれた。今年度の大学生とは隣り合う部屋に住んでいたので頻繁に顔をあわせており、彼女は日本の友達との交流を屈託なく語り、日本語教育について真剣に考えていた。彼らのそうした姿に接していると、皆が政治経済評論家になって世情を嘆く大人の社会の重苦しさから、しばし解放された気がした。

何より、ロシア語を話せなかった私にとってロシア語に通じた彼らはその分野での「先輩」で、文法を教わることもあったし、現地の教員や子どもが話している内容が分からないときに通訳をしてもらうなど、毎日のように助けられていた。

## 乾いた空気と健康管理

現地で私たちを悩ませたのは子どもの授業態度だけではない。もっとやっかいで重要な問題がある。それは現地の乾いた空気と健康管理のむずかしさだ。新学期の９月は丁度空気が冷え始める季節であり、湿度の高い国から来た日本人は低温低湿の環境に対応しきれず身体にストレスがたまりやすい。昨年度の日本人ボランティアは当初 6 人だったが、体調不良で1人は途中帰国してしまった。帰国しないまでも皆、大なり小なり風邪に悩まされ、熱を出したり喉や鼻を痛めたりしていた。喉を痛めることは致命傷で、特に低学年の授業で大きな声を出せなくなると、授業の進行はますます難しくなる。

2018 年度一緒に頑張った教師ボランティアの仲間たち

現地の空気は乾いているだけではない。1年を通じて首都周辺は車の排気ガスが多く、沿道には砂ぼこりが舞っている。冬場はセントラルヒーティングのために燃やす石炭の煙が漂う。南米諸国同様に発展途上の国々には大気汚染の問題がついてまわるのだ。遊牧民が馬で駆け回った国といえば、自然豊かで空気のきれいな所をイメージするかもしれない。だがイシククル周辺や農村、山間部に行けばその通りだが、首都近郊ではそれはもう過去のものになっている。大気の汚れですぐに病気になったりはしないが、赴任当初は街中の散歩が決して気持ちの良いものではなかった。

## 日本の大人として伝えたいこと

慣れない環境のなか日々の授業をこなすだけで瞬く間に日は過ぎていく。授業内容について深く考える時間もない実情を思うと「子どもをしつけるのは親で、授業態度を指導するのは担任や現地の教師の仕事。ボランティアの私たちは日本語教育に専念すべきだ」と当初は考えていた。今も基本的にそう思う。日本での外国語指導助手(ALT)などを思い浮かべれば外国人の語学教師に求められる役割は明らかだ。

しかし現地で生活を続けるなかで、少しずつ考え方が変わった。この国の人々にも事情があり、学びに対する意識も日本人とは異なる。会社が少なく国内で就ける仕事は限られているし、職を転々とすることが一般的だから職業意識を持つこともむずかしい。医師や教師など社会的に重要な役割を果たす仕事に就いても相応の対価を得られない。西側諸国の情報が少なく広い世界を視野に入れた学びの場がほとんどない。そんな社会的背景を持つ子どもたちに日本語の文法や会話だけを教えてみたところで、一体何の意味があるだろう。

「そうだ。そもそも私は日本語教師でもなければ教師でもない。単なる一日本人だ。日本の大人として全人格を通して伝えるべきことを伝えよう。親や現地の教師とは違う大人の役割を果たそう」。そう心に決めた。

次回は、この決心のもとに行った実際の授業内容についてお伝えしたい。(つづく)

# シベリアの愛♥ （その2）

# いざトムスクへ

稲塚　俊介（JIC 東京）

みなさん、コロナウイルスの影響で大変な状況ですが無事にお過ごしでしょうか。ロシアでは未だに感染者が増え続けているためロシア渡航はしばらくできそうにありません。しかし、必ず終わりは来るので、またロシアに行けるようになる時に備えてロシアへの愛を育んでいきましょう！

この記事を読んでロシアに行ってみたいと思う方がいれば幸いです。

前回の記事ではインターネットで知り合ったロシア人女性カーチャに会いに行くことを決心したところで話が終わりました。今回はその続きです。今回初めて読んでいただいた方は 2020 年 4 月号をご確認ください！

### ロシアまでの道はなかなか厳しい！

ロシアに行くことを決めても外国のためそれなりの準備が必要です。特にロシア旅行は旅慣れた人でも準備が大変ということなのできちんと調べる必要があります。今回は準備プロセスを交えながらトムスクに辿り着くまでの道のりをご紹介します。

### 渡航準備① パスポート - 申請で母親と揉める

いざロシア行きを決めても今回が初の海外旅行だったのでまず何を準備すればいいのかさっぱり分かりませんでした。それまで海外旅行の経験がなかったので初歩からのスタートです。

調べてみるとロシア旅行にはパスポート、航空券、ビザなどが必要ということが分かりました。その中でもパスポートがないと結局航空券の購入もビザ申請も出来ないことが判明したので、まずはこれを入手することにしました。最寄りの申請先で書類を提出して費用を払えば取得できるようでしたので早速用紙に記入しました。しかしここで予想外のことがありました。それは保護者のサインが必要ということ。この時まだ未成年だったので、自分ですべて完結させることができませんでした。普通に親にお願いすれば良いのですが実を言うと、この時ロシアに行くことをまだ親に話していませんでした。とりあえずさり気ないノリで母親にサインをもらおうとすると予想通り見事に揉めました（笑）。それもそうですよね。一人息子のはじめての海外旅行がロシアで、渡航目的がインターネットで知り合った女の子に会いに行くなんてなったら反対しますよね。険悪なムードになったので作戦を練るべく一度身を引くことにしました。言ってしまえば、自分で勝手に代筆する方法もありましたが、後々面倒なことになりそうだったので、きちんと承諾をもらうことに決めました。まずは渡航手段や連絡手段を明確にし、カーチャと Skype 越しに母親と話してもらうことで安心してもらう作戦にしました。まるで大学のゼミでプレゼンをするかのようにきちんと準備しました。いざリベンジするも、感触はイマイチ。しかし、サインするまでこちらは引く気がないと察して無言でサインしてくれました。最初からつまずいてしまいましたが大きな一歩を踏み出したのです。

### 渡航準備② 航空券 - 目指すはノボシビルスク！？

パスポートの用意ができたので次のステップです。今の時代はネットで簡単に航空券を買うことができるので skycscaner で探してみました。すると、出てくるルートは、直行便はおろかどれも 2 回以上の乗継ぎや所要時間が 24 時間以上のものばかりでした。早速このことをカーチャに相談してみると目的地としてノボシビルスクを指定されました。ノボシビルスクはシベリア最大の都市でトムスクまでの距離は 250km 以上ありますが、そこはお父さんと車で迎えに行くから大丈夫ということだったので、ノボシビルスク行きの航空券を探すことにしました。

2013 年に成田空港からノボシビルスクへ行くルートはロシア極東のウラジオストク、ハバロフスク経由やウズベキスタンのタシケント経由がありました。乗継ぎは必要なものの、トムスクを直接目指すよりは圧倒的に楽なルートです。今回はウラジオストク経由のウラジオストク航空(この航空会社はもう存在しておらず、今はオーロラ航空の一部になっています)をチョイスしました。入手したばかりのパスポート情報をパソコンに入力し、無事に手配が完了。

余談ですが、この時乗った飛行機がどこの航空会社だったか忘れてしまいました。唯一の手がかりの画像（機体の翼の先端部分だけ）があったので弊社の“歩く Google”こと K さんに見てもらうと見事にウラジオストク航空だと教えてくれました。頼もしい反面、ある意味マニアックすぎて怖いです！（笑）

### 渡航準備③ ビザ - ロシア旅行の難関

知っている人ならわかると思いますが、ロシアビザが旅行準備の中で 1 番の難関でした！JIC で働いていると、よくビザに関する問い合わせを受けますが、相談する方の気持ちが今になるとよく分かります。ご存知ない方のために簡単に説明すると、ビザというのは入国許可証です。受入国と入国者の国籍との関係によりますが、ビザを取得していないと入国できないケースもありますので旅行の前にしっかりと調べて

おきましょう！ちなみに私は数年前、ベラルーシ旅行に行く際にこのビザトラップに見事に引っかかり台無しになってしまった苦い経験を持っています（泣）。この話はなかなか貴重で面白いのでいずれどこかでご紹介します。

さて、肝心のロシアビザ申請の話に戻ると、申請にはかなりの手間がかります。在日ロシア大使館のホームページを見てもそもそもビザにも色々と種類がありどれを選べばいいか判断が難しいです。特に今回は単純な旅行用の観光ビザではなく、個人宅に滞在するためにビザが必要だったので尚更サッパリでした。そのためとりあえず六本木のロシア大使館に突撃することにしました！やる気満々で乗り込んだものの、建物に入った瞬間、館内の空気が違いすぎてすっかり意気消沈してしまいました。他の人も何人かいましたがとても静かで空気が冷たかったのを今でもはっきり覚えています。結局、何の成果も挙げられず撤収してしまいましたが、ちょっぴりロシアの雰囲気を感じることができたので満足でした。

しかし、ここで終わるわけにはいかないのでビザ取得代行を専門とする業者に依頼しました。ビザに不備があると入国できなかったり、出来たとしてもその後でバレたら大変なことになりそうなので、初回はプロに任せたほうが安心です。依頼すると大使館に行くことなく無事に取得できました。

ちなみに、条件にもよりますが、JIC でも代行申請可能なのでお困りの際はご相談ください！

ここまで読んでいただくとロシアビザ取得はとても大変だと思いますが、近年は緩和傾向にあります。すでに極東など一部地域を対象に電子ビザの導入が始まっており、近い将来ロシア全土に適用される予定です。ロシアがさらに近くなるので是非この機会に訪れてみてください！

**いよいよ出発！**

2012 年の後半から準備を進めてきて、初のロシア上陸は 2013 年 3 月に決まりました。大学生は春休みが長く、比較的空いているシーズンなのでこの時期に旅行する人は多いと思います。今回の旅は初めてということもあり 5 泊のスケジュールで行くことにしました。3 月にもなれば日本では春が始まり、徐々に暖かくなっていく季節ですが、ロシアはそこまで甘くはありませんでした。出発前に天気や服装についてカーチャに相談するとまだ平均気温はマイナス 10 度以下でした。日本の感覚で旅立っていたらロシア初日で終了するところでした（笑）。自分が 1 番だと思う防寒装備を選び、ついに出発の日を迎えました。

成田空港に到着してまずはチェックインカウンターに向かいました。ここで何か不備があったら出発できないのではととても心配になりましたが何事もなくチェックインすることができて一安心。このチェックインのドキドキは何度海外旅行してもなかなか慣れないです。特に前述のベラルーシ事件の後はさらに心配度が増してしまいました（笑）。

まずは中継地であるウラジオストクを目指してウラジオストク航空の飛行機に乗ります。そこまで飛行機に興味がなかったので写真を撮っていなかったのですが悪い印象はありませんでした。ネットで調べると「落ちそうで怖い」などマイナスイメージばかりが見られましたが、いたって普通でした。座席に着くと隣にロシア人夫婦がやってきました。愛想良く話かけてくれたので英語でやりとりをしてみると、2 人はスキーをするために来日したそうでした。内心ではロシアのほうがもっと雪はあるのではないか？と思ったが、雪の質が違うので日本でスキーをするのが好きらしい。幸先よくロシア人と初コミュニケーションをとれたので「これぞ旅の醍醐味」と思い嬉しくなりました。ウラジオストクに到着後、夫婦に別れの挨拶をして私は乗継ぎ便へ向かいました。

ウラジオストクからノボシビルスクへ行く飛行機も同様にウラジオストク航空でした。成田－ウラジオストク間は 2 時間弱の飛行時間でしたが、ウラジオストクからノボシビルスクまでは約 6 時間かかります。少し長いなと感じつつも、ついにカーチャに会えると思うとワクワクしてきて、案の定あっという間に着いてしまいました。

到着時間は夜 10 時近くだったため辺りは真っ暗で何もよく見えませんでした。しかし、飛行機から降りてシベリアの寒さを感じた瞬間「ここはロシアだ。ついに来たぞ！」という高揚感に包まれました。

ターミナルへ向かうバスに乗り込むと車内は電気がほとんどついておらず、どこかに送還されてしまうような雰囲気でした。ターミナルに着き荷物をとってゲートを出ると、そこにはいつもパソコンの画面越しにしか見たことがなかったカーチャがいました。嬉しい反面、違和感がありましたが、夜も遅かったので車に乗りました。

トムスクまで後少し！（つづく）

＊写真は現地の小学校。次回は町に繰り出します！

## 新刊 紹介

# 帝室劇場とバレエ・リュス

**平野 恵美子 著**
**出版社；未知谷**
**2020 年 7 月刊（480 頁）**
**定価；5000 円（税別）**

ロシア・バレエの人気は根強い。1909 年にパリで初公演を行い、《シェヘラザード》《ペトルーシュカ》などのモダンな作品で西欧の人々に衝撃を与えたバレエ・リュス。これらのバレエを創った振付家のミハイル・フォーキンや、V・ニジンスキー、アンナ・パヴロワといった有名ダンサー達は、ペテルブルクの帝室劇場でデビューし育まれたことをご存知だろうか。

一方、チャイコフスキーの音楽による《白鳥の湖》《眠れる森の美女》《くるみ割り人形》などのクラシック・バレエもまた、19 世紀のロシア帝室劇場から生まれた。本書では「民衆芸術」（フォークロア）をキーワードに、《せむしの小馬》に代表される帝室バレエの数々から、バレエ・リュスの《火の鳥》が誕生するまでのロシア・バレエの歴史を、最新の資料に基づき読み解いてゆく。

＊　　＊

ロシア・バレエといえば、チャイコフスキーの三大バレエを思い浮かべる人が多いのではないだろうか。だがそれ以前の歴史について詳しく書かれた日本語の書籍は、これまで森田稔氏の『永遠の白鳥の湖』（新書館、1999）を除き、ほとんどなかった。本書の第１章ではロシア・バレエ史の最も初期の時代から始まり、偉大なバレエ・マスター、マリウス・プティパの半生について記す。かつてバレエやオペラは皇帝の権威を高める手段だった。プティパは、アレクサンドル三世とニコライ二世の戴冠記念祝賀式典で自作のバレエを披露する栄誉に浴し、首席バレエ・マスターとしての地位を確かなものにした。この章では三大バレエ以外に、《パリの市場》《ロクサーナ、モンテネグロの美女》《フローラの目覚め》《真珠》等、プティパの知らざれる作品も数多く紹介する。

第２章では《せむしの小馬》を取り上げる。1890 年代と 1900 年代の帝室劇場で最も上演回数が多かったこのバレエは、今日でも時々上演されるが、当時は内容も音楽も全く異なっていた。P・エルショーフ原作の民話詩では皇帝が農民の子イワンに倒されるが、19 世紀のバレエ《せむしの小馬》では皇帝の代わりにカイサキ（カザフ系）＝キルギスの汗が打倒される。これは検閲の問題に加えて、当時、中央アジアを征服しつつあったロシア帝国の野望が反映されているのである。

第３章では、当時のロシア芸術が置かれた状況を概説する。西欧的発展の道程を歩む帝政ロシアでは、一方で自国のルーツに立ち返ろうとする傾向が見られ、芸術においては民衆芸術（フォークロア）に注目が集まった。これは「人民の中へ」（ヴ・ナロード）という、革命に向かう社会的な運動とも呼応していた。美術では最初に「移動派」と呼ばれる画家達が、虐げられた人々や社会の不正を画架に描いた。のちにバレエ・リュスを組織した S・ディアギレフら「芸術世界」派は、もっと唯美主義的だった。この「芸術世界」派の画家達は民話絵本の挿画に着目し、やがて劇場にまで活動の場を拡げて、舞台美術の世界に革新を起こした。本書ではロシア象徴派の画家達の作品や舞台美術の珍しい画像も多く掲載されている。

主にフランス人のバレエ・マスター達が君臨していた帝室劇場では、相変わらず 19 世紀西欧の古典主義的なバレエが上演されていた。そうした中でも、民話を主題にしたバレエが少しずつ創られ上演されるようになった。だが《せむしの小馬》に見たように、その実態は民話の世界からかけ離れていた。帝室バレエに君臨したマリウス・プティパの最後の上演作品となった《魔法の鏡》も、A・プーシキンの民話詩を下敷きにしているが「失敗作」の烙印を押され、プティパは引退した。このことはフォーキンら新しい世代の芸術家が活躍するための可能性を拓いた。バレエ・リュスは 1910 年にパリで《火の鳥》を上演した。これはバレエにおける最初の新民衆派芸術作品である。一方でプティパの作品もまた上演され続けた。第４章では、忘れられたバレエ《魔法の鏡》に目を向け、特にこれまでほぼ無視されて来たアルセーニー・コレシチェンコの音楽の謎に迫る。コレシチェンコはモスクワ音楽院で、ラフマニノフと同じく S・タネーエフと A・アレンスキーに師事した。ラフマニノフ以前に卒業時に大金メダルを授けられたのは、タネーエフとコレシチェンコの二人だけである。将来を嘱望された才能ある作曲家だったが、不運なコレシチェンコの名前は音楽史から消し去られてしまった。

＊　　＊

本書には附録として、ディアギレフの芸術的指向の表明（マニフェスト）である論文『複雑な問題』の全文日本語訳、1890 年から 1910 年の 20 年間のマリインスキー 劇場とボリショイ劇場におけるバレエとオペラの全レパートリーと上演回数、バレエ作品の演出と上演史など、大変貴重な資料が多く含まれている。おそらく日本では初めて書籍に掲載される美しい挿画の数々とともに、革命前の知らざれる帝室バレエとバレエ・リュスの世界に是非、触れて頂きたい。

## 日ロクラブ 講演会

2020 年 2 月 22 日、東京・お茶の水の連合会館で、日ロクラブ（江田五月会長）の定例フォーラムが開催され、「サハリン残留朝鮮人問題について」と題して、明石書店の関正則氏の講演会が行われました。1990 年代以降この問題を取り上げた代表的な書籍を紹介しながら、残留朝鮮人問題の歴史と変遷を戦後史と絡めつつ解説する内容で、現在のサハリンを理解する上で、また日本の戦後責任を考える上でも、示唆に富んだお話しでした。
以下はその講演録です。（文責；編集部）

# サハリン残留朝鮮人問題について

## ～祖国（パトリ）を奪われた人びと～

**関　正 則**（明石書店編集部）

### はじめに

サハリン残留朝鮮人問題について、これからお話しする内容は、私が自分で調査して実地に取材をしたとかインタビューをしたとか、そういうことではありません。あくまでもいくつかの本を読んで勉強したということに過ぎません。それで正直に、先に種本と言いますか、参考文献を紹介しておきます（巻末参照）。

時代的に大きく分けると、1992 年に国際法学者の大沼保昭さんが『サハリン棄民』という本を中公新書で出しています。それと内容的にかなり重なるのですが、角田房子さんの『悲しみの島サハリン』というルポルタージュが 94 年に出ています。サハリン残留朝鮮人問題が基本的にどういう問題なのかということは、この二つの本を読めばだいたい分かりますので、私もそれらを踏襲してお話ししようと思います。

ただ、お話をするにあたって、最近の研究がどうなっているのか気になっていくつか当たりました。玄武岩と書いてヒョン・ムアンと読むのですが、ヒョンさんとロシアのスヴェトラナさんという方が書いた『サハリン残留』。これは写真集のような体裁の本ですが、現在のサハリン残留朝鮮人、その 2 世、3 世の方々がどういうふうに暮らしているかを追ったものです。もう一つ、京都大学の中山大将さんの研究で『サハリン残留日本人と戦後日本』というのがありまして、これは最近読んでみて非常に面白く詳しい研究で、大沼さんたちの世代の研究に対してかなり新しい情報や見方を提供しています。

ですから、私はこの 1990 年代の研究と 2010 年代後半の研究を重ねて、おそらくこの問題はこういうことなのだろうというような話をさせていただくことになります。

### 祖国（パトリ Patri）という言葉

「祖国（パトリ）を奪われた人びと」という副題をつけましたが、パトリ Patri という言葉が以前から気になっています。と言うのは、例えば 1950 年代末に始まった在日コリアンの帰国運動がありますね。帰国というのは英語にするとリパトリエーション Repatriation です。パトリ Patri という言葉は、日本語にすると故郷とか郷土といったニュアンスに近いと思うのですが、パトリオット Patoriot 愛国者とかパトリオティズム Patriotism 愛国主義という意味でもパトリという言葉が使われる。パトリアーキー Patriarchy 家父長制という言葉もある。つまり、帰国 Repatriation という言葉には、単に故郷に帰るというよりも、先祖伝来の、やや家父長的な意味を含めた故郷、故国に帰るというようなニュアンスがあるのではないかと思うのです。リパトリエーションというのは、我々が故郷を懐かしがるという意味に加えて、何かある種の権威をもった故国、祖父の地に復帰しようとすること＝祖国への帰還ということなのだろうと私は感じています。

残留朝鮮人の方々にとってのパトリとは結局何なんだろう？ということをずっと考えていまして、そういうことを念頭に置きながら話をしたいと思っています。

### 1. なぜサハリン（樺太）に朝鮮人が多くいたのか

#### 移住朝鮮人と動員朝鮮人

サハリンは日本が戦争に負けるまでは樺太と呼ばれていたわけですが、そこに当時住んでいた朝鮮人は 1939 年で区切って二つの時代区分で考えるようです。これは中山大将さんの研究用語によるものですが、1939 年以前から樺太に住んでいた人は「移住朝鮮人」と呼ばれます。人数は 8000 人程度でした。39

年以降は日本の戦時体制、総動員体制によって動員・配置させられた人が増えます。これを「動員朝鮮人」と呼び、1 万 6000 人程度いました。

**戦前のサハリン（樺太）の人口構成**

| | 1930 年 | 1935 年 | 1940 年 | 1945 年 |
|---|---|---|---|---|
| 総　　数 | 284,490 | 322,475 | 398,837 | 382,713 |
| 内地人 | 276,876 | 313,115 | 382,057 | 358,568 |
| 朝鮮人 | 5,359 | 7,053 | 16,056 | 23,498 |
| 先住民族 | 1,933 | 1,955 | 406 | 406 |
| 中華民国人 | 174 | 103 | 105 | 103 |
| 旧露国人 | 148 | 197 | 160 | 97 |

表は戦前のサハリンの人口構成で、中山さん、太田さんの本からとったものです。内地人というのはほぼ日本人です。先住民はギリヤークとかニブヒと呼ばれるアイヌ民族と似たサハリンの先住民族です。

ご承知のように日露戦争後、サハリンの北緯 50 度以南が日本領となりました。日本の統治下で、林業、石炭、製紙業などの産業が活発になるわけですが、有名なものでは王子製紙が真岡（現ホルムスク）に大きな工場を置いていました。とりわけ 1930 年代後半、戦時体制になっていくと、炭鉱開発が進みます。動員以前から日本人あるいは朝鮮人が炭鉱で働いていたわけですが、戦時動員によって炭鉱業で働く人が 40 年代から急増しました。

**朝鮮人労働者の動員**

朝鮮人の動員の問題ですが、これは昨年来話題になっている徴用工と呼ばれる人々の問題と関係するわけです。ざっとおさらいしますと、1937 年に日中戦争が始まり、国家総動員法が 38 年 3 月に制定されます。これに基づいて 39 年ごろから朝鮮人労働者募集要項が内閣、政府主導で発令されます。当時の企画院という役所で計画を立案して閣議決定で募集要項が作成されています。企画院労務動員計画閣議決定と言われるものです。外村さんの『朝鮮人強制連行』(岩波新書)に詳しく書かれていますが、内地から何人、朝鮮から何人、台湾から何人と、動員人数を決めて、しかもそれをどこに配置するかまで計画を立てています。例えば 40 年の資料を見ると、朝鮮から 8 万 8000 人を集めて樺太へ 8500 人配置するとなっている。この通り実現しているわけではないですが、毎年計画を立てて閣議決定をしております。

ここで、強制連行があったとか、なかったとかいう議論がよくあるのですが、少なくとも政府主導で動員計画を立て募集が実行されたことは間違いないわけです。

用語としては、39 年は「募集」という言葉が使われます。42 年になるとこれが「斡旋」という言い方になる。「徴用」という言葉は、39 年に国民徴用令が出されて、当時は内地で日本人に対して徴用が行われるのですが、朝鮮人に対しては 44 年の 9 月にこれが適用されます。それで、1944 年までは「朝鮮人に対するいわゆる徴用はなかった」という言う人が出てきます。最近韓国で出版され、日本でも翻訳版が文藝春秋から出されて話題になっている『反日種族主義』という本を読んでみると、やはりそれに似た言い方をしていて、「募集とか斡旋には法的根拠がなかった。だから強制連行のような強制力を持った朝鮮人の徴用はなかった」というような書き方をしています。

しかし、募集なり斡旋なりの形ではありますが、実態としては日本政府が戦時労働力を動員するために人集めを行ったことは事実で、それに基づいて朝鮮ではやはり警察が協力しています。それから面長が動いています。面というのは村のことで、面長というのは村長です。村の有力者である面長や警察官が募集のために、「お宅の息子さん、あるいは旦那さん、是非日本で働いてはどうか」と説得して回ったという資料や証言が残されています。無理やり連れて行ったというような証言も無いわけではないのですけれども、そうでない場合でも、かなりの圧力があったことは間違いないと思います。

**在サハリン朝鮮人の多くが炭鉱労働者**

そういった状況の中で、サハリンには 1939 年以降約 1 万 6000 人の朝鮮人が動員されて来たわけです。終戦時 1945 年 8 月時点で、サハリンには 38 万人がいて、うち内地人は 36 万人弱、朝鮮人が 2 万 3500 人くらいいた。この朝鮮人たちの 3 割以上が炭鉱で働いていました。1944 年 2 月時点で全炭鉱夫の 35%が朝鮮人であったという数字があります。これはサハリンに限りませんが、当時は炭鉱事故が非常に多くて、39 年から 43 年の間だけでも炭鉱事故死傷者が 3 万 2000 人、うち死者が約 550 人出ています。危険な現場であったことが分かります。

石炭をサハリンから内地へ、サハリンが内地だったか外地だったか少し微妙で法的には内地法だったようですが、ともかく船で石炭を運んでいたわけですが、戦争末期になるとほとんどの船が沈められたり破壊されたりして不足し、サハリンから内地に石炭を運べなくなります。そこで終戦 1 年前の 1944 年 9 月に炭鉱夫を内地の炭鉱で働かせるために移住させている。サハリンから朝鮮人 3000 人を北海道、東北、九州へ移動させた。こういうことを見ても、動員朝鮮人たちは募集に応じて自由に出かけた移住者ではなくて、やはりある程度の強制力を持って配置させられた人々だったことが分かります。居住地も職場も上から決められるという状況だったわけです。

**「終戦」時の戦闘と混乱**

1945 年 8 月 9 日、ソ連が対日参戦します。サハリンでは、8 月 16 日に中央西海岸の恵須取(現ウグレゴルスク)にソ連軍が上陸しました。それから南下して、豊原(現ユジノサハリンスク)に入城するのが 23 日です。その間、かなり激しい戦闘が続いたわけです。日ソ停戦協定が結ばれたのは 8 月 22 日でした。

この終戦時の戦闘と混乱の中でいくつかの事件が起こります。一つは 8 月 20 日早朝に起こった「真岡の 7 人の乙女の自決」と言われる真岡郵便電信局事件です。これは郵便電信局で電話交換手として働いていた女性たちが、ソ連軍が来たら強姦されるという噂を信じて青酸カリで集団自殺した事件です。8 月 20 日

から 23 日にかけて「瑞穂村虐殺事件」が起こり、27 人の朝鮮人が惨殺されました。これは日本人による殺害です。さらに 8 月 17 日と 18 日に「上敷香（かみしくか）虐殺事件」。これは 19 人の朝鮮人をソ連のスパイとして警察署に連行し、銃殺したものです。

戦時下や混乱期にはよくあることですが、敵軍が侵攻してくるときに、味方側にスパイがいるのではないかとか、手引きしてる者がいるのではないかとか、疑心暗鬼に駆られて同胞や仲間を殺してしまう。実は沖縄戦でも似たような事件があり、久米島で日本軍による島民と朝鮮人の虐殺事件が起こっています。これも米軍の上陸を手引きしたのではないかと疑われて、島民が多数殺されていますし、小売りをしていた朝鮮人一家が殺されています。敵軍が迫る状況の中で、ある種の民族差別が下敷きになって、こういう事件が繰り返されるのですが、同じことが実際サハリンで起こっています。

## 2. なぜ残留した朝鮮人は「帰国」できなかったのか

### 「帝国」の崩壊と「引き揚げ」

戦後、外地に残された日本人や朝鮮人の「引き揚げ」が問題になります。

引き揚げと言う場合、日本人はもっぱら日本に引き揚げるという意味で使いますが、引き揚げ＝リパトリエーション＝祖国への帰還、復帰は、日本人だけの問題ではなかったのです。

第二次大戦後、大日本帝国が解体して、帝国の支配下にあった国や地域が国民国家、民族国家に再編される過程の中で、それぞれの民族、それぞれの人びとが故国に帰るべく動き出します。日本人は、外地から内地＝本土に戻ろうとする。これは戦地・占領地にいた兵士もそうですし、満州や台湾、東南アジアに移住していた民間人もそうです。同時に内地や日本の支配地域に住んでいた朝鮮人・台湾人も、朝鮮半島また台湾に帰ろうとします。実は 200 万人くらいの朝鮮人が日本や満州から朝鮮半島に帰ろうとしたと言われています。実際には、帰っても生活できないのでまた日本へ戻ってくる人も多かったわけですが。日本人が引き揚げるだけでなくて、帝国の中で配置された人々がそれぞれ帰るべきところに帰ろうとしたわけです。正確な人数はよくわかりません。600 万人から 800 万人の人々が大日本帝国の崩壊に伴って、故国に引き揚げようとしたと言われています。

### ソ連統治下のサハリン

ではサハリンではどうだったか。南樺太はソ連軍の占領下に置かれたわけですが、ソ連は 46 年 1 月 1 日に南サハリン州（クリル諸島を含む）を創設し、翌 47 年 1 月 2 日にはサハリン全島とクリル諸島をサハリン州に再編して統治を開始します。46 年 2 月 2 日、土地・資源・企業の国有化、地名のロシア語化が行われ、いわゆる共産主義体制の組織化が進められていきます。

ご存じのようにソ連は第二次大戦で大変大きな人的資源的損害を受けていましたので、労働力が極端に不足していました。南サハリンの統治のために、一つは大陸から労働力を移住させるということがありましたが、在住日本人、朝鮮人にもできるだけ職場に留まって仕事を続けさせようとした。そのために日本人あるいは朝鮮人の帰還が遅れたとも言われています。このことは日本軍捕虜のシベリア抑留問題にも関係してくるわけです。

### 日本人の「外地」からの「引き揚げ」

では、日本政府はどのように外地からの引き揚げに取り組んでいたのか。敗戦後、日本政府は GHQ（連合軍総司令部）の支配下にあるわけですが、外地にいる兵士や民間人をなるべく早く帰還させるために敗戦直後から動いていて、早くも 45 年 9 月 29 日に「日本軍隊・居留民の引揚げ実施要綱案」を GHQ に提出しています。これを受けて、GHQ は 10 月 16 日に「日本人の引き揚げに関する基本指令」を発出します。

翌 46 年 3 月に厚生省の外局に引揚援護院が設置され、同じく 3 月に GHQ が諸方針を統合して「引き揚げに関する基本指令」を出します。ですから 46 年の春には、日本人の引き揚げについて、GHQ と日本政府は基本方針を定めて動き出しているのですが、ソ連地区、ソ連軍占領地域における引き揚げは、この基本指令の内容よりも時間的に遅れて進むことになります。

### ソ連支配地域からの「引き揚げ」難航

ソ連支配地域からの引き揚げが難航したのは、一つはまず米ソ間、GHQ とソ連との間での交渉が遅れたからです。ようやく 46 年の 5 月頃から交渉が始まって、そこで当時一番問題になったのは、今の北朝鮮に残された日本人 23 万人の引き揚げです。この人たちがいわゆる 38 度線で足止めされている状況があって、これを何とかしなければならないということが主題の一つになっています。それからシベリア抑留者の問題ですね。独ソ戦で 2000 万人以上の犠牲者を出したソ連は、労働力不足を補うために捕虜・民間抑留者の労働力への転用を行い、60 万人以上の日本軍将兵をシベリアおよびソ連各地に抑留していました。

こうした中で 1946 年 12 月に GHQ（米国）とソ連の間で「ソ連地区の日本人捕虜・一般日本人の引き揚げに関する協定」が結ばれました。この協定に基づいて、サハリンからの引き揚げは、1946 年 12 月から 49 年 7 月まで、5 次にわたって行われます。

第 1 次（46 年 12 月）：日本人 5702 人帰還
第 2 次（47 年 1 月）：同 6103 人帰還
第 3 次（47 年春～）：同 18 万 865 人帰還
第 4 次（48 年）：同 11 万 4073 人帰還
第 5 次（49 年夏）：同 4709 人帰還

この結果、サハリンから 31 万 1000 人余りの日本人が引き揚げた。これを「前期集団引揚」と厚生省は呼んでいます。敗戦時に 35 万 8000 人いた日本人のうち、49 年の夏までに 31 万人以上が一応引き揚げています。しかし、米ソ冷戦が進み、1950 年 6 月には朝鮮戦争が始まりますので、米ソ間の交渉ができなくなって、49 年 7 月をもってソ連からの引揚事業は中断されてしまいます。

この 5 次にわたる引き揚げにおいて、サハリンにいた朝鮮人

は「排除された」という言い方は必ずしも正しくないのですが、引揚船に乗ることができませんでした。中には乗った人もいるようですが、基本的には朝鮮人は乗っていません。日本人だけが引き揚げたわけです。これがサハリン残留朝鮮人問題ということになります。

**ソ連の多民族統治がもたらした「排除」**

なぜ朝鮮人は引揚船に乗れなかったのか。一つは先ほど言ったソ連の労働力不足で、ソ連側とすればできるだけ労働力として残存させたかったのだろうと言われています。

また最近の研究では、別の見方も示されています。私も「なるほどそういうことか」と思ったのですが、ソ連はご存知のように多民族国家ですから、身分証明書には民族籍の欄があるわけです。1946 年にソ連の統治が始まって、サハリンでも住民に「国内証」あるいは「身分証」と呼ばれる証明書のようなものを発行しているのです。そこにやはり民族籍の欄があって、その人が日本人なのか、朝鮮人なのか、先住民族なのか、そういう記載欄があって、これで残留した人々を仕分けしたと言われています。ですから集団引揚にあたって、日本人が朝鮮人を排除したというよりも、ソ連の統治下で国内身分証に基づいて帰還者の選別が行われて、日本人は日本政府からの帰還要請に基づいて船に乗せる、朝鮮人は乗せない、という仕分けがなされたのではないかというのが最近の研究の見方のようです。

**日本政府の不作為がもたらした「排除」**

「日本政府が徴用してサハリンに配置した朝鮮人労働者を、日本政府はなぜ責任をもって帰還させなかったのか」ということが、後のサハリン裁判で問われることになるのですが、そういう責任は確かにあると思いますけれども、集団引揚に際して日本政府が朝鮮人を排除したというよりは、当時ソ連の統治下でそういう区別がなされていたことが原因であるという見方も可能かも知れません。しかし、非常に微妙な問題ではあります。

ただ、事情はそうであったとしても、日本政府はなぜソ連側と交渉して、残留朝鮮人を船に乗せなかったのかという問題は残ります。大沼保昭さんや高木健一さんは、集団引揚において日本政府が「日本の責任で募集し配置した朝鮮人がいるのだから、彼らが朝鮮半島に帰れるようにしてくれ」とソ連側に言うべきであったと主張されています。しかし、日本政府はそこまで積極的ではなかった。そういう意味では日本政府の不作為が朝鮮人の「排除」をもたらしたと言えるかもしれません。

これは日本政府の在日コリアンに対する処遇を見ても、結果的に国籍を奪うようなことをしていますから、「排除」の意思が働いたとしても不思議ではありません。在日コリアンと日本共産党が結びついて左翼運動が大衆的な盛り上がりを見せていることに対して、日本政府と GHQ は 1948 年ごろから非常に警戒感を強めていました。そういう意味でサハリンからの残留朝鮮人の帰還を歓迎しないという思惑はおそらく日本政府にあっただろうと思います。

**米ソ冷戦と朝鮮半島の「南北分断」**

では、アメリカはどう考えていたのか。1948 年頃ですが、GHQ 参謀部でサハリンの真岡から佐世保、釜山を経由して在留朝鮮人を朝鮮半島に帰還させる案があったようです。当時、朝鮮半島の南半分は米軍が軍政を敷いていたわけですが、在朝米軍政府はこれを全く取り上げていません。というのは、すでに 1947 年半ばには朝鮮半島の信託統治を協議する米ソ共同委員会が決裂し、南北分断体制の既成事実化が進行していたからです。48 年にはもう南半分だけで総選挙をやって単独国家を作る流れになっていますから、アメリカ自体がソ連に対する冷戦体制に入りつつあるわけですね。ですからそのソ連のサハリンに残留している朝鮮人をわざわざ日本経由で朝鮮半島に帰そうという意欲はアメリカにも無かったのだろうと思います。

結局、48 年 8 月に李承晩を初代大統領とする大韓民国が発足し、これに対抗して同年 9 月に金日成を首班とする朝鮮民主主義人民共和国が樹立されます。GHQ と日本政府は仲介機能を停止し、サハリンに残留する朝鮮人は置き去りにされたわけです。

**日本政府の旧帝国臣民への「棄民」政策**

サハリンからの集団引揚は 49 年夏の第 5 次引揚で中断し、残された人たちは帰れなくなってしまいます。

日本政府は、日本人以外の朝鮮人も台湾人も帝国臣民として兵士や労働者に徴用したわけですが、敗戦で帝国が解体すると、これら帝国臣民として徴用した人々に対して、もはや日本人ではなくなったとして一種の棄民政策を取ったと批判されています。とりわけ有名なのは、サンフランシスコ講和条約の発効（1952 年 4 月 28 日）直前に出された法務府民事局長通達です。「条約の発効で朝鮮と台湾は日本の領土ではなくなるので、これに伴い朝鮮人と台湾人は内地に住んでいる者を含めてすべて日本国籍を喪失する」として、日本政府は朝鮮人・台湾人から日本国籍を剥奪しました。この結果、在日コリアンは 1965 年の日韓条約まで無国籍者となってしまいます。

無国籍状態という点では、サハリンに残留した朝鮮人も同じ目に遭っています。サハリンに残った人々は、ソ連の支配下において生活していくためには、ソ連籍を取るか、北朝鮮籍を取るか（実は労働力不足で当時北朝鮮からソ連に入って働いていた人もかなりいました）を迫られるわけですが、どちらの国籍も取らない人々は、主に南朝鮮出身者ですが、やはり無国籍者として扱われたわけです。これはサハリンに残った朝鮮人だけでなく日本人も同様です。

## 3. サハリン残留朝鮮人の生活

**「三種類の朝鮮人」**

戦後のサハリンには、「三種類の朝鮮人」が住んでいました。

まずは、戦前日本から移住または動員されてサハリンに残留した朝鮮人（約 2 万 3500 人）です。2 番目は 1946 年から派遣労

働者のような形で北朝鮮からサハリンに働きにきた人々。1949 年までの間に約 2 万 6000 人が北朝鮮から移住しています。3 番目はソ連系朝鮮人です。戦後、ソ連国内から朝鮮系の人々がサハリンに移住してきています。1930 年代後半にソ連の沿海州に朝鮮人がたくさん住んでいました。当時、満州にも朝鮮人がたくさん入っていますが、日本の植民地支配で土地を取り上げられ暮らせなくなった人々が沿海州や満州に移住したと言われています。その沿海州に住んでいた朝鮮人を 1937 年にスターリンが中央アジアに強制移住させまず。戦時色が強まり、日本のスパイが入り込むのを警戒した措置でした。移住させられた朝鮮人たちの一部が戦後、極東地方に戻ってくるのですが、その中からサハリンに移住してきた人々が約 2000 人と言われています。

**ソ連系朝鮮人が主導権を握る**

このソ連系朝鮮人たちが、サハリンの朝鮮人社会で行政上、教育上の主導権を握ることになります。この人々は、自分たちが先にソ連に忠誠を誓ってますから、残留朝鮮人に対して差別的というか、「親日」的だという理由で見下すような態度を取った。そのことを残留朝鮮人が非常に悔しく記憶している証言がたくさんあります。これはいわゆる「親日問題」と言われるもので、朝鮮・韓国では今でも尾を引いている問題です。つまり、「日本の統治下で植民地支配に協力していた朝鮮人」という形で、同胞を攻撃するわけです。

サハリンに残留した人たちは、日本人はもちろん朝鮮人も、半分日本人だとか、親日的だとか言われて、ソ連籍の人々から迫害を受けることがあったようです。そういうことで、戦後のサハリンでは日本統治期から住んでいて帰国できずに残留した人々が冷遇されたわけです。

また、南朝鮮出身の朝鮮人で帰国を諦め切れない人は、ソ連籍も北朝鮮籍も選ぶことなく、無国籍となったわけです。これらの人々をどうやって帰国させるかという問題は、日ソ国交正常化（1956 年）でやっと主題化されることになります。

## 4. サハリン残留朝鮮人帰還運動の開始と困難

**日本人妻とその家族の「後期集団引揚」**

先ほど「前期集団引揚」ということで、1946 年末から 49 年にかけて朝鮮戦争が始まる前に行われた日本人の引き揚げを紹介しましたが、その後、朝鮮戦争の勃発とともに世界の冷戦構造が確立し、そもそも帰還交渉が出来なくなるわけです。ようやく 1956 年 10 月に日ソ国交正常化がなされて、シベリア抑留で最後まで残されていた日本人 1025 名がその年 12 月に帰国しました。

この時、サハリンに残されていた日本人の帰還問題にも再び焦点が当てられます。

前期集団引揚で 49 年までに帰国しようとした人の中で、朝鮮人と結婚していた日本人、いわゆる日本人妻ですが、この人たちは帰国できなかったんですね。この日本人女性たちを帰国させる交渉が行われ、1957 年の 8 月から 59 年 9 月にかけて、サハリン残留日本人妻 766 人とその夫・子供 1541 人、計 2345 人が日本に引き揚げます。これが「後期集団引揚」です。日本人妻にとっては帰国ですが、その夫や子供にとっては日本入国ですね。この時の日本政府の扱いが酷かったと大沼先生は非常に憤っておられるのですが、日本人妻の「付け足し」と言うか、「付録」のような形で朝鮮人も入国させてやったというような扱いだったようです。具体的なエピソードでは、帰国船の中で日本政府が弁当を配った時に、奥さんと子供の弁当はあっても夫の弁当はなかった。また、成田愛子・孫鐘運夫妻の場合、孫鐘運さんの父・孫致圭さん（62 歳）が、直接日本人と血のつながりがないという理由で、帰国者リストから除外されて、一人サハリンに残された。そういった酷いことが伝えられています。

そこまで血としての日本人とそうでない者を分けるのかと大沼先生は怒って、「血による差別」があったと批判されているわけです。

**サハリン残留朝鮮人帰還運動の始まり**

この後期集団引揚が、実はサハリン残留朝鮮人帰還運動が始まるきっかけになります。

日本人妻の同伴家族として、大沼先生によれば「付録扱い」で、日本に入国した朴魯学、李義八、沈桂變の 3 人が中心になって、1958 年 2 月に「樺太抑留者帰還同盟」（後の「樺太帰還在日韓国人会」）を結成し陳情活動を始めました。この 3 人はサハリンを出る前に、残された人たちから「取り残された自分たちのことを何とかしてほしい」と強く懇願されていたようです。朴魯学（パクノハク）さんが、これ以後中心となって帰還運動が開始されます。これがいわゆるサハリン残留朝鮮人の帰還運動ということになります。

**理解されなかった残留朝鮮人帰還運動**

ただこの帰還運動はタイミング的には非常に難しい状況下で始まりました。

在日朝鮮人社会で 1959 年 12 月から北朝鮮への帰国事業が始まります。実際そういう流れが以前からあったわけですが、日本で暮らす在日朝鮮人たちは様々な形で差別されており、それへの不安と反発が一つ。もう一つは、朝鮮戦争の停戦協定が 1953 年 7 月に結ばれて後、いち早く復興したのは北朝鮮の方でした。北の方が工業生産力があり、いわゆる社会主義 5 か年計画などで早く立ち直るわけですね。それから社会主義に対するある種の信奉もありました。そういった背景のもとで行われた帰国事業で約 6 万人の朝鮮人とその家族が北朝鮮に渡るわけです。

日本にいる在日コリアンは南出身の人が実は多かったんですね。だからいわゆる帰国事業と言いますが、故郷の南朝鮮・韓国に帰るのではなく、多くの人は「将来南北統一を果たせば北朝鮮に行っても南の故郷へ行き来できるようになるだろう」という思いをもって北朝鮮に行った。しかも社会主義国家というものに期待を抱いて北朝鮮に行った。帰国事業というよりも移住事業だ

ったと思いますが、当時そういう勢いというか熱気が在日朝鮮人社会を覆っていました。

そういう時代に、サハリンから日本に帰還した人たちが、サハリン残留朝鮮人を韓国に帰してくれという運動を始めるわけですから、当時、在日朝鮮人社会の中でも相当抵抗や反発が強かった。あれは反ソ・反北運動だという見方をされたようです。

**立ちはだかる国際政治の壁**

冷戦構造と南北分断の下で、サハリン残留朝鮮人帰還運動は大きな壁に突き当たります。

一つはソ連自身の問題です。ソ連はいわゆるゴルバチョフ改革が始まるまでは、基本的に国内移動の自由がない社会で、ましてや国民の外国への出国・移住は非常に厳しく制限していました。

また、北朝鮮は在日コリアンを北朝鮮の国家建設に参加させるために帰国事業を推進しているわけですから、これと真逆の動きである残留朝鮮人の帰還運動に強硬に反対しました。

韓国は当時、北に対抗する反共国家として成り立っていたわけで、60 年代になると朴正熙の独裁政権時代になりますから、いくら朝鮮人だからあるいは韓国に血筋を持つからと言っても、社会主義国からの引揚者をとても受け入れようとはしません。

日本政府も、ソ連が出国させる、韓国が入国させる、その両方を条件として、経費を韓国が負担するなら通過国として入国を許可するという、韓ソの対立を見越して事実上拒否する方針を取ります。国家としては当然の態度なのかも知れませんが、日本の責任でサハリンに残留した人々を積極的に故郷に帰してやろうなどとは考えないわけですね。この問題は国交正常化のための日韓会談（1951 年～65 年）でも十分に扱われておらず、残留朝鮮人帰還運動はなかなか実りをあげません。

**緩やかな進展**

朴魯学さんたちが設立した樺太抑留者帰還同盟は、1967 年 7 月にサハリンから帰還を希望する 7000 人の名簿を完成させ、翌年韓国にも持っていきます。70 年 12 月には韓国で「樺太抑留僑胞帰還促進会」（後、「中蘇離散家族会」に改称）が設立されます。また、この抑留という言葉はいかにもソ連が朝鮮人を拘束して留め置いたというニュアンスを持ちますから、抑留という言葉を使わないようにして、この帰還運動は反ソ的なものではないんだということをしきりに主張するようになります。

ちょっと面白いのは、田中角栄首相が 1973 年のブレジネフとの首脳会談でこの問題に言及し、帰還要請をしてるんですね。田中角栄という人は非常に面白い発想をする人で、こういった人情噺に心が動いたということがあったのかも知れません。しかし、ソ連側はそれを拒否しています。

**「ナホトカの 4 人」（1976 年）**

これも有名なエピソードですが、「ナホトカの 4 人」という事件が 1976 年に起こります。これはソ連が 4 人の残留朝鮮人の出国を許可するのです（注）。4 人はナホトカ港から船で日本に来て、韓国に帰還する予定でナホトカまで行くのですが、韓国が経費負担を拒否したため、日本が入国を認めない。かなり時間がたってから韓国と日本は入国を認めるのですが、今度はソ連の出国期間切れになってしまって、4 人はナホトカからサハリンに戻されてしまった。4 人はそのままサハリンで亡くなってしまいました。

これは、いくつかの本に必ず出てくる話です。ソ連の出国制限、韓国の入国規制、日本はあくまでも経由地として全く責任ある対応を取らない、そういう事情が重なって、南出身の残留朝鮮人がサハリンに足止めを食ったままの状況がすごく長く続くわけです。

注；1970 年代には米ソの緊張緩和もあり、ソ連はソルジェニーツインに代表される反体制派知識人やユダヤ人の出国（海外亡命）をある程度認めるようになる。ソ連側から見ると「国外追放」でもあったわけだが、4 人のサハリン残留朝鮮人の出国許可が出た背景にはこのようなソ連当局の変化があったと思われる（編集部）。

## 5. 新しい運動と問題の政治化

**「新しい運動」の流れ（ニューレフト）**

いわゆる米ソ冷戦構造の中で 1960 年代までは、資本主義か社会主義かというイデオロギー的対立・政治的対立が、世界でも日本でも社会と人々の意識を縛っていたわけです。日本で言えば社会党とか共産党が自民党と激しく対立して、政治運動を展開していました。そういう中で、1970 年代ぐらいから、新しい社会運動あるいはニューレフトと言われるイデオロギー性を超えた社会運動が始まってきます。ベトナム反戦とかフェミニズムもそうですし、日本で言えば戦争責任論ということが 70 年代ごろから言われるようになってきます。

サハリン残留朝鮮人問題では、1973 年春に三原令さんという日本人女性が「帰還在日韓国人会に協力する妻の会」という組織を結成します。「帰還在日韓国人会」というのは朴魯学さんが作った「樺太抑留者帰還同盟」が抑留ではまずいということで改称したものです。これを支援する女性たちが出てきます。

1974 年 5 月に、この韓国人会と妻の会、そして韓国の帰還促進会の 3 団体が連名で日本の各政党に公開質問状を出します。「日本の責任でサハリンに韓国・朝鮮人が取り残されているのだから、日本の政治家が何とかこれを解決するように」という趣旨の質問状ですが、その解答が一番ひどかったのは社会党だったと大沼さんの本に出てきます。ソ連べったり、北朝鮮べったり、「北朝鮮やソ連がよいと言わない限り、何もしようがない」というような回答だったようです。

**「サハリン裁判」（1975 年 12 月提訴）**

そこで、政党が対応してくれないのであれば、裁判を起こそうということになります。1975 年 12 月に「サハリン裁判」が提訴されます。柏木博・高木健一弁護士らが中心となって、「樺太残留者帰還請求訴訟」が起こされました。

この裁判の評価は人によって分かれるところですが、非常に長く続いて結果的には一審判決が出ないままで終わってしまいました。日本の戦争責任や植民地支配の責任を問うという問題提起には意義があったけれども、実際の司法的な意味はあまりなかったと言われています。

また、この裁判や運動に対して左からの反発も強くて、「反ソ・反共・親韓運動である」とか、「KCIA・勝共連合に操られている」とか、そういった非難中傷がありました。裁判もなかなか進展しないまま、運動が盛り上がらず停滞しました。

李恢成さんはサハリン出身の在日朝鮮人作家で、在日作家としては最初に芥川賞を取った人ですが、1983 年に『サハリンへの旅』という本を書いています。やはり帰還運動を批判していますね。「韓国とつながってるんじゃないか」という視点で書かれています。ですから当時は、政治家も文化人もまだまだ冷戦思考から脱することができなかったということです。

**「アジアに対する戦後責任を考える会」**

こういう状況の中で、大沼先生が 1983 年 4 月に「アジアに対する戦後責任を考える会」を結成して、サハリン残留朝鮮人の帰還運動を継続されます。代表は、大沼保昭、田中宏、有吉克彦、高木健一、幼方直吉、内海愛子の各氏です。『戦後責任』という雑誌が出されて、活発な活動が展開されるのですが、高木健一さんとか内海愛子さんのように現在も活躍されている方が中心になって、日本でいわゆる戦後責任ということが言われるようになったのは、意外なことに、戦後直後からでなく 80 年代からなんだなと改めて思います。

**民間外交のアプローチ**

1985 年 3 月にゴルバチョフがソ連共産党書記長に就任し、ソ連の外交姿勢に柔軟化の兆しが現れます。そこで、大沼先生たちは民間外交でこの問題を打ち破ろうとする努力もしています。

松前重義さん（東海大学総長、日本対文協会長）を介したソ連対策、ソウル大学の李漢基さんや大韓赤十字総裁の劉彰順さんを介した韓国対策、社会党の和田静夫衆議院議員を介した北朝鮮との交渉などもされています。面白いのは、安倍首相の父親、安倍晋太郎外相がシュワルナゼソ連外相とこの問題で 86 年に議論していることです。シュワルナゼは最初突っぱねたものの一旦は持ち帰って検討すると言うのですが、二回目にはやはり善処できないということだったらしい。このように、86 年ごろには少し流動化するのですが、松前さんと大沼さんがモスクワに行って直接交渉しようとしたらソ連側からほとんど相手にされず、このアプローチも立ち消えになりました。

**「議員懇談会」による政治的アプローチ**

やはり民間外交のチャンネルでは解決が難しいということで、大沼先生たちは次に「サハリン残留韓国・朝鮮人問題議員懇談会」を設立されます（87 年 7 月 17 日設立総会）。会長は自民党の原文兵衛氏、事務局長は社会党の五十嵐広三氏で、当時の安倍晋太郎自民党総務会長や土井たか子社会党委員長、江田五月社民連委員長など衆参 138 人の議員が参加しています。

実は私がこの問題に関心を持つようになった一つのきっかけは、この後、大沼先生が和田春樹さんらとともに従軍慰安婦問題で立ち上げられたアジア女性基金です。この時もやはり原文兵衛さんと五十嵐広三さんの力を借りてるんですね。ですから、私はこのサハリン残留韓国・朝鮮人問題議員懇談会の経験が少なくとも大沼さんにとっては一種の成功モデルとして、アジア女性基金になったのではないかと思っています。

国会議員を動かすことで、サハリン残留朝鮮人問題に一定の成果がもたらされたわけです。これによって国家予算がつくようになりました。ざっと並べると、87 年度予算 227 万円、88 年度 834 万円（うち再会支援費 391 万円）、89 年度再会支援費 5800 万円、90 年度 1 億 333 万円、91 年度 1 億 2000 万円、92 年度 1 億 2537 万円の予算がついています。

**再会支援事業**

再会支援というのは、サハリン残留朝鮮人を日本に呼び、韓国からその家族、親族を日本に呼んで、日本で家族を再会させる事業です。この再会支援事業は、韓国でもサハリンでも行われるのですが、90 年代になると 1 億円を超える予算をつけて事業を行っています。

なぜ日本で再会の場を設けたのか。いわゆる日本の動員によってサハリンに働きに行った人々の多くは、2 年くらいの契約で行っているのです。若い人で、結婚して間もないような人が多かった。いわば 2 年間出稼ぎに行くような気分でサハリンに行って、炭鉱や林業などの現場で働いて、では 2 年たったら帰れるかと言うと、事業者が引き続き働くように命令するとか、強制的に貯金させられたお金を出してくれないとか、なかなか帰れなかった。韓国に残った家族の方は、とくに奥さんは貧しい生活をしながら子供を抱えて、ずっと旦那が帰ってくるのを待っていた。そうして戦後、生き別れになったわけです。サハリンに残留した人は結局帰れなくなって、そこでまた結婚している人が結構多いんですね。子供もできている。その人が、では家族を連れて韓国に帰れるかというと、帰れないわけです。そういうケースがたくさんあって、当事者同士が日本で再会する場を設けたわけです。

冷戦終結に向けた流れの中で、サハリン残留朝鮮人問題にも一定の解決の条件が現われ、「議員懇談会」を通じた政治圧力の利用と相まって日本の国予算による再会事業が行われるようになりました。しかし、1988 年 3 月にこの残留朝鮮人帰還運動の中心だった朴魯学さんが亡くなり、運動団体は「サハリン再会支援会」と「サハリン残留韓国・朝鮮人援護会」に分裂し、その後、運動自体は下火になっていきました。

## 6. 脱冷戦後の一定の成果と残された課題

**日韓赤十字社共同の支援事業（1989 年開始）**

冷戦終結を決定づけたのはソ連のゴルバチョフ改革ですが、もう一つの大きな動きは韓国自体の民主化です。1987 年の国

民投票による憲法改正と大統領選挙によって、韓国はかつての反共独裁国家から民主国家に生まれ変わります。1988 年にソウルオリンピックが開催され、1990 年に韓国とソ連の間で国交が樹立されました。

この東アジアにおける冷戦構造の大きな変化の中で、1989 年に日韓赤十字社の共同事業として、「在サハリン韓国人支援共同事業体」が設立され、①残留者の一時帰国支援、②永住帰国支援、③サハリン残留支援の 3 つの事業が進められることになります。

当事者は帰ることができても、それぞれに家族がいて、一緒に暮らすことはとてもできない人もかなりいるので、まずは顔を合わせて互いの無事を確認しあう再会事業を行う。それからいつか国に帰ろうと結婚せずに独身を通した人もいます。そういう人の永住帰国を支援する。ソ連籍を持ちサハリンですでに家族を作ってソ連国民として生活をしている人に対しても、一定の生活支援を行う。そういった事業が行われています。

韓国には 2000 年 2 月、安山市に永住アパート（故郷の村）が作られて、500 世帯くらいの帰還者がそこに入居しているということです。ただ、韓国に戻ってはきたけれど、必ずしも幸せな老後生活を送れるかというとなかなかそうもいかない例もあるようです。

サハリンには、ユジノサハリンスクに「サハリン韓国文化センター」が 2006 年に建設されています。これはサハリンに残留した人たちが故郷を偲び、韓国語や文化に触れ、また地域住民との交流の場を提供するものだと説明されています。

**現在のサハリン**

現在サハリンに住んでいる朝鮮系の人びとは、すでに残留朝鮮人の 2 世、3 世の世代になっています。玄武岩（ヒョン・ムアン）さんとスヴェトラナさんの『サハリン残留』という本には、その人たちがどのような生き方をしているのか、わりと詳しく現状が書かれています。戦後サハリンに残留した人たちは非常な苦労をしたわけですけれども、2 世、3 世のとくに若い人はロシア語もできるし、韓国語もできる。中には日本語ができる人もいるわけで、それを使って非常に積極的に生きているようです。もちろんロシア社会特有の困難や苦労はあるでしょうが、暗い面ばかりではないということもわかります。やはり若い世代では、自分が朝鮮人だとか、ロシア人だとか、単一のアイデンティではなくて、複層的なアイデンティティをもって、そういうものを生かして逞しく生きているということも事実だと思います。

とは言え、だからそれでよかったのだと、日本人である私たちが彼らの親や祖父母の世代の苦難の歴史を忘れて、あるいは知らないままにいてよいとは思えません。最近の日本の風潮では、アジアにおける日本の戦争や植民地支配について、その日本の責任を追及する／されることを厭う傾向が強いと思います。確かに、今回サハリン残留朝鮮人についてみたように、朝鮮・韓国人がサハリンで働くようになり、また長く故国に帰ることができなかったことの責任がすべて日本にあると考えることは、必ずしも歴史的な事実からは正しいとは言えません。しかし同時に、戦時中の日本の動員・配置によって、故国を離れ家族と別れてサハリンの炭鉱で働き、帰国することなく亡くなった方が数多くいることも事実です。そうした人びとへの日本の責任を自覚して運動を起こし、各国と連携しながら彼らの「祖国への帰還」の道を開いたことはやはり貴重な成果であったはずです。そして思うのは、彼らはいったい何を奪われ、そして何を回復し得たのかということです。

私は、今回の話に「祖国（パトリ）を奪われた人びと」とタイトルを添えました。そしてパトリには、愛国主義や家父長制に結び付くような含意もあることを述べました。ですから、生まれ育った故郷に帰りたい、父祖伝来の地で死にたいと願う人の心情も理解できますが、必ずしもそれが「祖国」であるべきだとは思いません。現在、新型コロナウイルス問題で、私たちは移動の自由を制約されています。国境を越えることができません。先日もある若い哲学者が、近代社会が刑罰として監獄を発明したのは移動の自由が人間の根源的な自由であることをよく理解していたからだと説明していました。現在ではテクノロジーによって身体を移動せずとも得られる多くの自由を得ていますから、まさか監獄にいるようだとは思いませんが、国や地域の中に幽閉されているような感覚を覚えることはあります。

日本によって「動員」された人びと、「故国」に帰れなかった、あるいは「故国」にしか帰れなかった人びと、彼らが奪われた自由とは何だったのか、改めてそのようなことを考えています。

**参考文献；**

『サハリンへの旅』李 恢成著
（講談社文芸文庫、1989 年／親本は 1983 年刊）
『サハリンからのレポート：棄てられた朝鮮人の歴史と証言』朴 亨柱著（お茶の水書房、1990 年）
『サハリン棄民：戦後責任の点景』大久保 昭著
（中公新書、1992 年）
『悲しみの島サハリン：戦後責任の背景』角田 房子著
（新潮文庫、1997 年／親本は 1994 年刊）
『今なぜ戦後補償か』高木 健一著（講談社新書、2001 年）
『朝鮮人強制連行』外村 大著（岩波新書、2012 年）
『サハリン残留』玄武岩、パイチャゼ・スヴェトラナ他著
（高文研、2016 年）
『サハリン残留日本人と戦後日本：樺太住民の境界地域史』中山 大将著（国際書院、2019 年）
『中国・サハリン残留日本人の歴史と体験』太田 満著
（明石書店、2019 年）

# 新型コロナウィルスから
# "いのち"と"文化芸術"を守ろう！

## 《ロシア文化フェスティバル2020》

## 9月9日、東京でオープニングコンサート

### ●「芸術の大使館」室内楽コンサート

国際コンクール優勝者 4 人による競演
　～ヴァイオリン＆オーボエとピアノのコンサート
日時;9 月 9 日(水)14:00 開場、15:00 開演
会場;銀座ブロッサム(東京メトロ「新富町」または「東銀座」駅)
入場料;全座席指定　8000 円
主催;ロシア文化フェスティバル 2020 IN JAPAN 組織委員会
＊開演前に日露両国代表による挨拶があります。

### ●モイセーエフバレエ　民族舞踊アンサンブル公演

10 月 27 日　17:30 開場　埼玉／さいたま市文化センター
10 月 29 日　17:30 開場　東京／めぐろパーシモンホール
10 月 30 日　14:00 開場　東京／新宿文化センター
全席指定;S 席　12000 円　A 席　8000 円(茨城公演は別料金)
主催;ロシア文化フェスティバル日本組織委員会

## 《ロシア映画情報》

### 映画「ドブラートフ」 6 月 26 日から公開中！

旧ソ連の体制下で作品発表の機会を奪われ 1970 年代に移民としてアメリカに逃れて、ロシア語で作品を発表し続けた作家ドブラートフ。ソ連解体後ロシアで最も読まれる作家になったドブラートフは、しかし、その栄光を見ることなく 1990 年 8 月にニューヨークで病没しました。1970 年代初頭のレニングラードを舞台に人生の希望と絶望のはざまで格闘したドブラートフの 6 日間が濃密に描かれています。

新型コロナのために公開延期となっていた映画「ドブラートフ」(2018 年、アレクセイ・ゲルマン・ジュニア監督) が、6 月 20 日から東京で公開され、順次全国で公開されています。料金は全国共通で、前売 1500 円、当日 1800 円。

**公式サイト** → http://dovlatov.net/

### 映画「オーバー・ザ・リミット」全国公開中！

新体操の女王マルガリータ・マムーンの苛烈な物語。リオ・オリンピック金メダリストの想像を絶する舞台裏を描いて話題の作品です。6 月 26 日から東京、千葉、神奈川、愛知、大阪、広島など全国で公開中です。

**公式サイト**→ https://otl-movie.com/

### 映画「剣の舞」～我が心の旋律

「仮面舞踏会」「剣の舞」など数々の名曲を残した作曲家アラム・ハチャトゥリャンは、プロコフィエフ、ショスタコービッチとともにソビエト 3 大巨匠の一人と称されます。第二次大戦下のソ連を舞台に、巨匠の若き日々を描き、わずか一晩で作られた「剣の舞」の誕生秘話に迫る感動作です。

7 月 31 日から北海道、東京、神奈川、愛知、大阪、福岡など全国で公開予定。

**公式サイト**→　https://tsurugi-no-mai.com/

## ◇◆編集後記◆◇

▼新型コロナウィルス禍の終息はまだ見えません。各国の非常事態宣言や外出規制は解除されたとはいえ、まだまだ第 2 波、第 3 波に備える毎日。国境が開放され自由な海外旅行が復活するのはかなり先のことになりそうです。▼ロシアの感染拡大が収まっていないのが心配です。死亡者数はアメリカやブラジルよりはるかに少ないとはいえ、予断を許しません。▼JIC の旅行業務はこの 4 月から休業状態ですが、オンライン留学相談を始めたり、来年の旅行企画を考えたり、取り組みを始めています。ここはじっと耐え偲び、体力を温存して将来に備える以外にありません(F)